日米小学校交流事業の中間報告：

―国際理解活動の新しい可能性を求めて―

越智豊（東京大学）

A Mid-term Report on Partnership Project between U.S. and Japanese Elementary Schools:

Aiming at Exploring New Possibility for International Understanding Activities

Yutaka OCHI
The University of Tokyo

Author's Note

Yutaka Ochi is a Special Appointed Associate Professor at the Center for Advanced School Education and Evidence-Based Research at Graduate School of Education, The University of Tokyo.

Abstract

This report is about a partnership project between U.S. and Japanese elementary and secondary schools which started in July, 2017 and is going to finish in August, 2019. It is also aiming at finding a new perspective and exploring new possibilities for international understanding activities. This project started from the Program for Teaching East Asia at the University of Colorado at Boulder. It offered mutual understanding activities between U.S. and Japanese elementary and secondary schools. In June, 2017, 13 U.S. junior high school teachers came to Tokyo and visited a junior high school. In June, 2018, 11 U.S. elementary school teachers visited 5 elementary schools in Tokyo, participated in classes, gave lectures, and stayed at homes of the students during the weekends. They have been corresponding letters to and from the students between the partnership schools by airmails and e-mails. This report will show the mid-term results of these activities and try to suggest new ways of thinking in international understanding studies in elementary and secondary education through the experiences of the project.

Keywords: communication among the same age groups, finding new perspectives from the conventional life styles through the comparison between different cultures

日米小学校交流事業の中間報告：

国際理解活動の新しい可能性を求めて

1　日米小学校交流事業の発端と目的

この日米小学校交流事業は，コロラド大学東アジア教育プログラム（略称：TEA）の担当者より， 2020 年東京オリンピック･パラリンピック大会開催に際して文化的国際交流の機運が高まることを契機に，日米双方の初等・中等学校の交流を東京大学の担当者に提案されたことから始まる [(1)]。

TEA の目的は，アメリカの学校教育における東アジアの教育と学習を充実，発展させることにある。「オリンピック・パラリンピックを通じた友好：日本とアメリカのグローバル社会に生きる力を身につけるための小学校教育」がスタートし， 2017 年 7 月から 2019 年 8 月までのプロジェクトとなった。日本とその文化を理解する教育のカリキュラム開発，専門的な知識と技能育成のための企画が組まれ，初等教育の具体的なプロジェクト活動には，ワークショップ [(2)]，夏期研究セミナー [(3)]，日本研修ツアーが含まれる。

日本側の中心となった東京大学大学院教育学研究科学校教育高度化・効果検証センターでは，この事業に向けてのスタッフを構成し，アメリカの同年代の子どもたちがどのような関心を持ち，学習をしているかを日本の小・中学生に理解してもらい，多様化する国際社会に対する思考力や対応力を養う機会としたい，というねらいをもってアメリカ側からの提案に応じた。

2　全体計画

表 1　オリンピック・パラリンピック教育振興プロジェクト全体計画(TEA)

2017 年 7 月-12 月	アメリカの現職中学教員東京訪問 アメリカの学校委託 東京の学校への委託 春期導入コース計画
2018 年 1 月-4 月	夏期研究セミナー計画 日本側との情報交換活動 コロラド大学東アジアプログラム 日本講座ウェブ・セミナー 東京訪問のミーティング 訪問団に関する情報交換
2018 年 6 月	アメリカの教員東京訪問 ・パートナー校での授業参観と教育に関する交流機会 ・情報交換計画会議 ・学際的な講演 ・児童向け書籍を通じた日本の教育に関する実地体験
2018 年 7 月-8 月	情報交換活動 東京セミナーの振り返り 初年度報告
2018 年 9 月-12 月	アメリカ側ウェブ・セミナー パートナー校間の交流活動
2019 年 1 月-5 月	写真・動画による交流活動 振り返りウェブ・セミナー,

	教材作成 振り返り集約調査
2019 年 6 月-8 月	日本側の交流活動のまとめ ビデオ，教材の出版，配布，宣伝 ２年目の報告

3 アメリカの教員による東京訪問の事例

3.1 アメリカの現職中学校教員による東京訪問

2017 年 7 月の約一週間，アメリカ各地からコロラド大学東アジアプログラムの日本研修ツアーに参加した 13 人の現職中学校教員が東京を訪問した。コロラド大学から教員 1 名が引率，東京のインターナショナル・スクールの教員が現地案内役を務めた。一行は 1964 年開催の東京オリンピック競技会場や 2020 年の東京オリンピック・パラリンピック開催予定会場を視察し，東京のインターナショナル・スクール 1 校，公立中学校 1 校を訪問した。公立中学訪問に際し，東京大学の本事業スタッフが受け入れ校の許諾，スケジュールと内容の相談，当日の同行と案内に当たった。当中学校は東京都のオリンピック・パラリンピック教育アワード校として表彰されており，それまでにも数多くのオリンピック・パラリンピックの選手を招待するなどの経験があった。今回の訪問に際しても午後の 2 時間ほどの時間帯をフルに生かして，生徒代表による歓迎から，アメリカ教員の授業参加，部活動での歓迎活動や日本文化の紹介等の特別なプログラムが組まれた。参加したアメリカの教員たちはアメリカの歌の合唱に感激し，授業への参加こそ求めてきたものであるとの感想を残した。

3.2 アメリカの現職小学校教員による東京訪問

2018 年 6 月後半，アメリカの公立小学校 6 校の教員合計 11 名がコロラド大学の本プログラム代表教員の引率のもと，東京の公立小学校 5 校を訪問した。代表教員は 4 月に東京を訪れ，事前に東京大学側スタッフと打ち合わせをした。訪問後第 1 週の 3 日間で参加者全員が東京の 5 校すべてを午前，午後に分けて訪問し，それぞれ全校の様子を見学した。2 日目には東京大学教育学部棟で日本の教育に関する講義を受け，東京の 5 校の関係教員と共に歓迎会に参加した。週末は各校の児童の家庭にホーム・ステイやホーム・ヴィジットを行うなどして，小学生の生活に触れた。また，都庁のオリンピック・パラリンピック展示を見学し，銀座から皇居を散策，日本食を味わう機会も持った。第 2 週はそれぞれのパートナー校を 3 日連続で訪問し，登校時から下校時まで児童と共に過ごした。授業を参観，参加し，自前の授業も行った。給食を共に食べ，掃除やその他の特別活動も経験した。1 校当たりの参加者数や自前の授業の回数などに差はあったが，直に日本の小学生の生活に触れ，引き続くパートナー校同士の交流活動に関して打ち合わせをして訪問を終えた。それぞれの学校でお別れ会などの企画もあり，児童も参加者も印象に残る活動となった。

4 アメリカの教員たちの授業例

4.1 第一小学校（仮称）

カンザス州 A 小学校 A 教員， B 教員

４年生の授業①：カンザス州がアメリカ合衆国の州になった記念日の紹介と地図上で州の位置を知る活動。Kansas のつづり方，州の形が長方形であることを学ぶ。

４年生の授業②：カンザス州の特徴を表す八つ

のものを知る活動。バッファロー，小麦，綿花，ミツバチ，マキバドリ，サンショウウオ，ヒマワリ，陸ガメをカードで示して発音し，動物の食べ物などについて説明する。八つの語が入った詩を教員に続いてリピートして読む。教員の読みに従って配られたプリント上の絵を指さす。八つの語が入ったビンゴ・ゲームをする。

4.2 第二小学校（仮称）

コロラド州 B 小学校 C 教員, D 教員, E 教員, F 教員

３年生の２クラスに向けた授業：英語で挨拶，自分の名前を言う。アメリカの地図でコロラドの位置を示す。１年間の月の名前を絵のカードで覚える。日本に関する英語の絵本を使って年中行事を英語で学ぶ。誕生日の言い方を覚える。誕生日を扱った英語のゲームをする。時間の表現についての質疑応答をする。コロラドの地図，単語カード，アメリカについての本と旗をおみやげに渡す。

4.3 第三小学校（仮称）

イリノイ州 C 小学校 G 教員

4.4　６年生 2 クラス合同の授業：G 教員の自己紹介。アメリカついての話，シカゴについての話。小学校の紹介，子どもたちの学習や生活についての説明。ビンゴ・ゲーム。質問コーナー：①アメリカになくて日本にあるものは?（給食・掃除の時間など）②日本とアメリカの授業で，違う教科は? ③休み時間には，どんなことをして遊んでいるの? ④シカゴの自慢は? ⑤有名な観光地は? ⑥人気のスポーツは? ⑦今，人気のあるもの，流行っているものは?

4.4 第四小学校（仮称）

コロラド州 D 小学校 H 教員， E 小学校 I 教員, J 教員

1 年生の授業：Hello の歌。コロラドのダンスとゲーム。紙工作でムース（シカ）作り。

２年生の授業：紙工作でトウモロコシ作り。野菜，果物の英語名の練習。アメリカの小学校のビデオによる紹介。

３年生の授業：電子黒板で画像を見ながらダンス。コロラドの動物の説明。アメリカの小学校のビデオによる紹介。

４年生の授業：アメリカと日本の時差がわかる紙工作の時計作り。プログラミングの「スクラッチ」。HELLO ダンス。

５年生の授業：コロラドにいる動物の名前と鳴き声。ダンス。紙工作でマウンテンライオン作り。

4.5 第五小学校（仮称）

ネブラスカ州 F 小学校 K 教員

４年生の授業：絵本を実物投影機で映し出してネブラスカ州の隣のカンザス州の小学生の生活を紹介。日本の小学生の生活と比較しながら，違うところと同じところを子どもたちに問いかけていく。国から都市や町，家や部屋へと範囲を狭めながら話を進める。

5 訪問後の東京の小学校の反応

5.1 訪問直後の感想

第一小学校 校長

・訪問全体については，やりくりが大変ではあったが，子どもたちにも先生たちにも良い経験になった。

・最終日には急遽全校でお別れの会を開き，２人の先生たちの挨拶と児童代表のお礼の言葉を

交換した。最後にアメリカの歌を歌いながら，子どもたちがアーチを作ってお別れするときには２人は涙を浮かべて感激する様子も見られ，子どもたちにとっても良い思い出になった。

・今後の通信方法については，DVD にビデオレターを収めて，東大経由で送るなど最初は原始的な方法で始めたいが，そのうちネットも使っていきたい。

第二小学校 校長，国際教育担当・３年担任教諭

・４人のアメリカの先生を受け持ち，時間割のやりくりは大変だったが，子どもたちもよく取り組んでいた。

・英語が使える児童が多いので，通訳を買って出たりするなど，児童が活躍する場面も多かった。

・４人の先生がそれぞれ別のクラスで給食をとるなどして子どもたちとの触れ合いも多かった。

・今後のネットを通したやり取りなどもスピード感を持って行っていきたい。

第三小学校 校長

・第１週の全員の訪問の際は，できる限り日本の小学校の１日がわかるように設定できて良かった。

・紙芝居を使った授業を見てもらったり，給食やその後の歯磨きを見てもらったり，日本の小学校の様子をわかってもらえたと思う。

・アメリカの先生による授業は，打ち合わせや準備が大変だったが，子どもたちに良い刺激になったと思う。

・準備は念入りにする必要があると感じた。今後のやり取りに活かしたい。

第四小学校（仮称）校長，副校長

・アメリカの先生たちがとても親しく接してくれて，子どもたちが休み時間に話しかける様子も見られた。

・アメリカの先生たちに全学年のクラスに授業をしてもらえてよかった。学年に応じた授業を組んでくれた。年齢に合った題材を選んだり，今習っていることに合わせたりしてくれた。

・今後の交流では，総合的な学習で行っている４年生のプログラミングを中心とした活動，英語の授業では両校の子どもたちの意見交換などを行っていきたい。

第五小学校　校長，副校長

・東大在学の中国からの留学生も手伝いに来てくれて，アメリカの先生と共に交流ができ，国際的な感じが増した。

・書初めの授業でいっしょに習字をするなど，日本の文化に触れてもらうこともできたと思う。

・実際に行った授業などで，アメリカの子どもたちと日本の子どもたちの生活に共通点が多いことがよくわかった。

・今後の交流も，歴史的なことや子どもたちの生活の様子の交換など，できることから行いたい。

5.2 児童へのアンケート結果 (4)

質問１：アメリカの先生たちといっしょにやったことについて，おぼえていることをかいてください。（自由記述）

質問２：アメリカの先生たちがくるまえとあとで，なにかきもちにかわったところはありましたか。たとえば，えいごについて，アメリカやアメリカの人たちについてのかんがえがかわったところがあれば，かいてください。（自由記述）

表２　アンケート結果集計

質問１（覚えていること）			
活動の種類	女	男	計
授業・学んだ内容	**175**	**134**	**309**
英語の授業,アメリカ学校のビデオを見た,など			
作業に関すること	**177**	**83**	**260**
ムース,トウモロコシ,マウンテンライオン,ヒマワリを紙で作った,など			
給食・食事	**94**	**88**	**182**
給食やご飯をいっしょに食べた			
体験的な活動	**81**	**67**	**148**
歌,踊り,ビンゴ，お楽しみ会,そうじ,登校など			
コミュニケーション	**37**	**40**	**77**
話した,家族の写真を見せてくれた,など			
質問２（訪問前後の自分の変化）			
訪問の感想	**73**	**75**	**148**
アメリカの先生たちは優しかったなど			
英語，英語の学習	**88**	**48**	**136**
英語を使えた,もっと勉強したい,など			
知ったこと	**72**	**64**	**136**
アメリカの学校では体育は私服,昼食の中身を選べる,身の回りに動物がたくさんいる,など			
今後への期待	**21**	**11**	**32**
アメリカについてもっと知りたい,行きたい,など			
東京の小学校のアンケート回答児童数			
１年生	**58**	**64**	**122**
２年生	**47**	**53**	**100**
３年生	**61**	**75**	**136**
４年生	**92**	**77**	**169**
５年生	**52**	**56**	**108**
６年生	**36**	**34**	**70**
合計	**346**	**359**	**705**

5.3　小学校の担任教員へのインタヴュー結果 (5)

インタヴュー項目１：今回の訪問についての感想

「気付いた点」

・準備段階でコロラドの小学校のビデオを見せたときに子どもたちは，「体育の種目を児童が選べる」,「図書館にソファがあったりしてくつろいだ様子」,「机の形や配置がいろいろある」,「校庭にアスレチックがある」,「みんなパソコンを使っている」など，東京の学校と異なる点を挙げていた。

・アメリカの先生たちの授業は，地図や写真，カードなどをだんだん付け足していき，子どもたちの関心を引き付けていくのが印象的だった。また，ゲームやダンスがその地域の紹介の役割も果たしていることに気付いた。

・単語ごとにジェスチャーを交えて表現してくれたのでわかりやすかった。

・ビンゴなどのやり方もいろいろな工夫があって，教材作りに対する新しい観点がもらえた。

・ダンスから突然始まるなど，いつもの授業スタイルとの違いに自分も子どもたちも驚いた。

・絵本を使ってアメリカの小学生の話をしてもらい，自分たちと違うところ，同じところがわかり，異文化理解につながったと思う。

「子どもたちの様子，変化」

・準備段階では，アメリカの小学校のビデオを見て，子どもたちからおもてなしをしようという案が出て，日本を紹介する壁新聞を作った。

・英語が好きな子にとっては交流の準備にアク

ティビティを考えるなどの積極性が見られた。苦手な子も給食の時間などにアメリカの先生と触れ合うことでアメリカの生活などに興味を抱いている様子だった。

・ダンスには乗っていける子どももいたが，なかなか思い切って動けない子も見受けられた。

・今回訪問したアメリカの先生たちには日本語がほとんど通じないので，子どもたち自身が「自分たちがなんとかしないと相手にわかってもらえない」という意識を持って取り組んでいた。

・アメリカの先生が来て， 授業時間中ずっと英語漬けになることができた。

・勇気をもって「ハロー」と声掛けして，通じた喜びを持つ子もいた。

・アメリカの先生の話はわからないところもあったと思うが，なんとかわかろうと，一生懸命聞いている子どもが多かった。

インタヴュー項目２：今後の交流に期待するところ

・できたらうれしいという気持ちが子どもたちの学習を支えているので，英語も実際に通じたらうれしいという場面を増やしたい。

・手紙での交流に期待する。返信したい，こちらからも発信したいという気持ちが子どもたちに芽生えている。

・アメリカの小学校との交流には英語を使うことは必然性があるし，通じる喜びも得られるだろう。

・子ども同士の積極的なやり取りの中から生まれる「真正性」が欲しい。

・英語を使って目的を達成できる試みを増やしたい。

・外国語に対する苦手意識をなくしたい。

インタヴュー項目３：普段の英語の授業について困っていること（もしあれば）

・英語の授業づくりにはまだ慣れていないので，教材準備の時間が足りない。

・日本語を使えばコミュニケーションができてしまう環境で，英語を使わなければならない必然性を持たせることはかなり難しい。

・ALT との授業の流れの確認は，前の週や当日の朝に行っているが，場所や時間，進行など，意思の疎通が十分に取れないままに授業を迎えていることも多いと思う。

・単独で行う時間は， TT の授業との違いが出せるようにしたいが，うまくできず，教科書と電子黒板に頼りがちになってしまう。

・実際は使わないような表現を教えてしまいそうでこわい。

・文法的な説明はしないのだが，写真や動画などに付随する文だけでは児童の理解が不十分だと感じる。

・「外国語＝英語」になってしまっていて，他の言語を扱う機会が少なく，多文化理解につなげるのは難しい。

・英語の専科の先生が学校にせめて１人はいてほしい。

インタヴュー項目４：今後授業でやってみいたいこと

・オリンピック・パラリンピックを関連させたり，子どもたちの普段の活動を反映させるなど，楽しみながらできるもの，英語で活動する必然性があるものに取り組んでみたい。

・物語を読むなど考える内容のある学びをさせたい。

・自分たちの生活を言い表せる英語の例文が欲しい。

・子どもたち同士が意見を対等に交換して進める活動をしてみたい。

6 アメリカの小学校と東京の小学校の交流の事例

6.1 第一小学校とカンザス州 A 小学校

A 小学校より第一小学校の児童たちへの質問や今後の学習活動への期待を伝える手紙を送付。

第一小学校は，児童の学校生活を写した写真と解説文（英語）をパワーポイントにして A 小学校にインターネットを介して送付。登校から靴の履き替え，廊下の右側通行，ランドセルや持ち物の置き方，授業の様子，中休み・昼休みなどの休み時間，給食，掃除，低学年の集団下校や放課後の校庭開放など児童の様子を 59 枚の写真と共に解説。

6.2 第二小学校とコロラド州 B 小学校

第二小学校の 3 年生から学校生活に関する質問を英語に翻訳し，インターネットを介して送付。「遠足はどんなところへ行きますか」，「縦割り班のような学年を超えた活動はありますか」など。

B 小学校の児童がその返事に自分たちの写真を付けて返答，またその返事を英語のまま第二小学校の授業で紹介。英語が堪能な児童が他の児童に向けて日本語で説明。

B 小学校では校舎内に交流事業の展示コーナーを設置し，2019 年 1 月にはジャパン・ウィークと称して，日本について焦点化した学習活動を全校規模で展開。

6.3 第三小学校とイリノイ州 C 小学校

C 小学校の児童たちは，日本文化に触発されて作成した絵・工作の作品の写真や，活動の動画をインターネットを介して第三小学校に送付。あわせて， 東京を訪問した教師のクラスの児童たちが，自己紹介の手紙や今回の交流に関する感想を書いた旗や社会科の授業の様子を写した写真を第三小学校の 6 年生に郵送。また，他の学年にも日本や第三小学校に関する授業を実施。

第三小学校からは，当校の 60 周年記念行事を伝える写真に英語の説明を付けて C 小学校へインターネットを介して送付。また，60 周年記念誌一式と冊子中の 6 年生のページ「10 年後の自分へのメッセージ」に英訳を付けて郵送。校内に C 小学校との交流スペースを設置。また，C 小学校の児童から郵送された個々の児童の自己紹介に対する返事を郵送予定。

6.4 第四小学校とコロラド州 D 小学校と F 小学校

D 小学校では，東京を訪問した教員が日本や第四小学校での自身の経験について教職員に講義。E 小学校では，理科の授業で日本の昆虫とアメリカの昆虫を比較する授業を実施し，児童はポケモンカードのようなものを作製して昆虫の持つ大きな力を表現。

第四小学校では，当校の 2 年間に及ぶプログラミングの授業の一環で 4 年生がグループごとに「スクラッチ」により同校や日本文化に関する紹介動画プログラムを作成。児童が作ったオリジナルのキャラクターがプログラムの画面上で動き，英語で解説していく。同校の公開授業でも多くの参加者に披露。出来上がった作品を D 校と F 校にインターネットを介して送付予定。

6.5 第五小学校とネブラスカ州 F 小学校

第五小学校の 115 周年に際して作成された当

校の歴史を示すパワーポイントの記事を英語に翻訳し，インターネットを通じて F 小学校に送付。戦時中や復興の様子を当時の校舎や町の様子も含めて解説。

F 小学校では第五小学校の歴史を社会科の授業で紹介。子どもたちに日米関係を考えさせる授業を展開。

F 小学校より地元開催の水泳選手権に際し，当校児童たちがダルマを作成して選手たちを応援する様子を写した一連の写真を送付。

7 報告のまとめ

7.1 これまでの成果

・アメリカの教員による 2018 年 6 月の小学校訪問に際しては,2017 年 7 月の中学校訪問の経験を活かし,授業だけでなく,登下校,休み時間,給食や掃除,放課後の様子といった児童の学校生活の全般を直接体験してもらうことができた。加えて児童の家庭にホーム・ステイやホーム・ヴィジットし，家庭での生活も経験した参加者も多かった。さらに,東京オリンピック・パラリンピックに関する情報収集や東京の地理・歴史を知る場所の訪問も行えた。この経験を元に,アメリカの教員たちは本国に帰り,日本の小学生の生活や日本の文化について報告し,その後の学習活動や東京のパートナー校との交流に結び付けている。

・アメリカの教員による授業も,授業の進め方や教材の扱いなど,双方に慣れない点もあったが,学年に応じての工夫もなされ,児童にも教員にも新鮮なものとなった。

・東京の児童へのアンケートからは，子どもたちの多くがこの体験を通じて，アメリカという国やコロラド，カンザス，シカゴといった地域，またアメリカ人，自分たちと同年代の子どもたちの生活に関心を抱いたことがわかった。交流体験を踏まえて，今後の学習の発展を望む記述も数多く見られた。直に触れ合う機会を得たことで，「アメリカの先生たちが優しく接してくれた」，「自分の英語が通じた」と喜ぶ児童もいた。

・東京の児童のアンケートには，「アメリカは銃を持った人が多くて，怖い国だと思っていたけど，先生たちは優しいと思った」という回答もあった。受け入れ側の東京の先生たちも，アメリカの教員の子どもに対する接し方や教材の提示の仕方，授業の展開の方法など，普段の自分たちとは異なる点への気付きがあった。

・アメリカの教員にとっては，登下校や一日の時間配分をはじめ，児童の持つ同じ形の筆箱や，上履き，体育着と紅白帽など，身の回りのものに至るまで，日本人にとって日常のものが特別なものとして目に映ったようである。しかし，滞在を通して，日本の子どもたちがアメリカの子どもたちと同じようにたくさんの表情を見せてくれて，改めて小学校教育のやり甲斐を見出す機会となったようだ。

・日米双方合わせて 5 組 11 校の小学校が，ほぼ 1 対 1 でパートナーの関係を結び，並行して交流を２年間行うというやり方から，今後の日本の国際交流の在り方に「同年代の同時進行の理解」という示唆を与えるものとなるようにしたいと考える。訪問後の交流活動においては，それぞれのパートナー校同士の学校紹介，学校の歴史や行事に関する記録を写真やパワーポイント，動画などで紹介し合うことができつつある。学校生活や学習内容に関する質問をやり取りするなど，子どもたち同士がわかり合おうとする学びが生まれている。

7.2 これまでの課題

・今回の小学校訪問は，前年度末に提案していたが，細部に関しては 4 月に入ってからの打ち合わせとなり，年間計画に沿って学校運営が行われる日本の学校にとっては，難しい点も多かった。その上,5 校同時進行というスケジュール上の条件もあり，受け入れ校には多大な労力をお願いすることになった。事前の打ち合わせに関しては，授業などの活動においても担当するクラス担任教員を含め，シミュレーションを重ねる必要があった。

・訪問第 2 週には各校に東大のスタッフを毎日 1 人は配置したが，十分とは言えなかった。英語が堪能な児童が多い学校では，児童が活躍する場面も増えたという報告もあったが，言語の面でも場所移動や打ち合わせなどで，受け入れ校には負担を掛けた。

・アメリカの教員による授業に関しては，当初の提案では日本の小学生に「英語で」物語を読み聞かせて感想を問う，というものが多かった。この交流事業の最終目標としてはそこまでできるようにしたいが，訪問の段階ではまだ難しいと思われた。そこで，アメリカの小学校の紹介を中心に組み替えてもらった。工夫された授業で，多くの児童は惹きつけられている様子だったが，低学年の児童には作業そのものが印象に残り，その意図する教育内容（たとえばアメリカの動物の特徴など）まで理解が及んでいない様子や，いつもの授業の進め方との違いに戸惑う児童の姿も見受けられた。事前に担任教員との打ち合わせや情報伝達があれば，ある程度不安を緩和することができたかもしれない。

・半年経った現在，パートナー校とのやり取りは,1 往復から 4 往復程度できたところである。双方の学校同士で期待する活発な交流を妨げる要因としては以下の二つの点が挙げられる。一つは行事計画についての日米の対応の違いであり，もう一つは通信媒体の扱いの違いである。

日米双方とも，計画に沿って行事を行うのが基本であるが，日本では新しい内容を入れる場合，計画の範囲内で行うのに対し，アメリカでは行事を行う中で内容や方法を合わせていく部分が多く，双方に時間や行動の及ぼす範囲に差が出てしまう。

インターネットなどの通信媒体とそれに伴う写真の取り扱いなどには，日米間の慣習や学校間の使用状況にはかなりの違いがみられる。肖像権の扱いやデータ通信のセキュリティー問題などをクリアしつつ，互いの置かれている条件などについても相互に理解していく必要がある。

7.3 今後の展望

残り数か月となった今回の交流事業であるが，第一に日米双方の子どもたちに同年代の心の交流を図りたい。これまでは互いの紹介や質問による共通点探しであったが，今後は同じものを見て何を思うのかを共有し，そこから意見を交わして，互いの成長を確認できるような機会づくりにしていきたい。

7.3.1 交流に関するアイデア

これまでの交流から得られた今後のパートナー校同士の交流に関するアイデアを挙げる。

子どもたち同士の生活内容がわかるもの

・学校の紹介：国の中での地理的な位置とその地域の特徴，学校の歴史，クラスや子どもたちの作っ

ている

委員会，チームなどを紹介する。

・朝登校してから夕方下校するまで学校での生活を，子どもたちの言葉で表現して交換する。

・学校生活で楽しいことを共有する。

・学校外での生活：学校がある日の家での様子，週末や長期の休みにやっていることや，その楽しみを紹介する。

学びの中で共通するもの

・それぞれの学校の教科で学んでいることを伝える。

・地域社会とのつながりについて学んでいる事柄を紹介する。

・相手の国について何を学び，何を知っているか，どんなイメージを持っているかを交換する。

子どもたちが主体となって作る教材

・自分の好きなことを紹介する。

・お互いのことについて質問し合う。

・日本の子どもがアメリカの子どもに日本語や日本の文化について伝える。もちろん，その逆もあるが，英語に偏らない。

・アメリカの子どもたちからの質問に基づいて，日本を紹介するものを作成する。

同年代が考える事柄の交換

・同じ物語などの感想や意見を交換する。

・同年代の子どもに共通する興味・関心に基づいた話題を共有する。

・世界中の同年代の子どもたちが抱える問題について自分たちの今表現できる言葉で意見を交換する。

7.3.2 課題の克服に向けて

日米の子どもたちに心の通う交流をしてもらうためには，児童の置かれた学習環境の整備と内容の吟味，方法の改善が挙げられる。

学習環境整備として現時点で望まれることを挙げる。まずは東京大学のスタッフも小学校の授業に参加し，実情を踏まえた上での支援活動を考えたい。大学生のインターンシップ制度などを活用して，通訳や翻訳を必要とする活動支援や放課後などの児童の学習の補助を受けられるようにすることなども将来的には考えられる。

また，教育行政にも望まれる改善がいくつか挙げられる。

・教員の多忙を軽減するため，事務手続きの簡素化を図る。承認や許可を求める回数や段階を減らし，児童の変化する活動に素早く対応できるように体制を整える。

・ALT や英語専科の教員を増員させるとともに，打ち合わせの時間を時間割内に確保できるようにする。

・一つのクラスを半分に分けたり，ティーム・ティーチングを導入するなど，児童一人ひとりに対応できる適正な人数設定に近づけていく。

・教員の自己裁量の幅を広げ，自主教材や自主企画が随時入れられるように援助していく。

・教員の自主的な研修機会を充実させる。また，そのための時間確保や資金面での援助をする，

などが挙げられる。

学習内容の吟味に関しても，小学校と大学などが協力して，できるところから改善を図りたい。

・自分たちの文化と相手国の文化を紹介し合うところから，共通点や相違点，あるいは普段気が付かなかった自分たちの習慣などについても考える。

・子どもたち同士の発想を活かす内容を充実さ

せ，物語などの感想や意見などを共感できるものに発展させる。

・世界の子どもたちが同年代で抱えている問題に対しての意見を交換する。そのための良質な例文を集め，多文化理解を進めるための教材開発をする。

方法に関しても，教室や学校単位，地域や学校間に改良の輪を広げていきたい。

・授業中では自動翻訳なども使用しながら，子どもたちが知っている言葉をできるだけ平易な文で表現できるようなやり方を導入する。

・パソコンやインターネットを有効かつ安全に使えるようにするための手段の開発と情報の共有をする。それにより，子どもたちの表情を伝えたり，意見を交換したりする活動が迅速に行えるようにしていく。

・小学校同士，中学校，大学をはじめとする地域の連携を深め，子どもたちの将来の学習の発展も視野に入れた連絡体制を構築する。

以上列挙したうちのいくつかでも改善されていけば，子どもたちの学習に対する新しい試みへの援助となり，教員の負担軽減にもつながるであろう。今回のプロジェクトもその一助としたい。

7.3.3 中間報告から今後に向けて

子どもたちと直に接し，また 1 対 1 で交流し合う経験を通じて，予想していなかった共通点と相違点を見出すことができつつある。学校という繰り返しの多い枠組みの中にいると，普段当たり前になりすぎて気付かない事象から，発想や思考回路まで習慣づけられてしまうこともある。いつの間にか「普通」になっていることに気付かないまま，それを基準に次の判断をしている可能性がある。子どもの頃から違いや共通点を意識しつつ，他者を理解し，自分たちの陥りがちな先入観，偏見，独善を修正していけば，大人になって大きな隔たりをつくらなくて済むのではないか。他人と自分とのコミュニケーションのみならず，自分の中にある無意識の自分に対する理解もできるようになる。外国語活動や異文化理解，多文化共生も，これまで出会わなかったものに出会い，受け入れることが，相手にとっても自分にとっても成長をもたらすことだと知ることから，初めの一歩が踏み出せる。今は別々の国にいる同年代の子どもたちが互いの生活や学習の様子，興味・関心，抱いている将来への希望を理解し，分かち合うことで，多様化する国際社会に対する思考力や対応力を養っていってもらいたい。

謝辞

今回のオリンピック・パラリンピック教育日米小学校交流事業にご協力いただいた皆様に深く感謝申し上げます。まず，アメリカ側ではコロラド大学ボールダー校東アジア教育プログラム関係者，東京大学学校教育高度化・効果検証センタープロジェクト関係者，及び，南部和彦先生，日本側受け入れ校，川上智先生，伊藤正泰先生，伊東直貴先生，野村正司先生，石井卓之先生，森村聡彦先生，間宮多恵先生，春木静香先生，柏葉清志先生，瀬沼美雪先生，加藤拓先生，原香織先生，吉岡淳先生，藤田寛樹先生，安田八志麻先生，近藤沙映先生，菅谷万里子先生，大島賢先生，藤沢佑先生，アメリカの先生方，ローデス・バス先生，ドーン・マーサー先生，ロクシー・バトクス先生，マリア・デラクルーズ先生，エイミー・ベルカストロ先生，マンディー・シュナイダー先生，カレン・クルジストフ-バンズレー先生,トリッシュ・ドゥフリーズ先生,

ジル・モリミツ-メーイン先生, ジェイミー・カリー先生, スーザン・ドゥ・ロイ先生に深く感謝申し上げます。

注

(1)「オリンピックを通じた友好：グローバル社会に生きる力を身につけるための日米小学校教育」は, 国際交流基金, グローバル・パートナーシップ・センターが資金を提供する教員の専門的な知識と技能育成の開発を日米の学校が連絡提携する 2 年間のプロジェクトである（2017 年 7 月～2019 年 8 月)。アメリカ側はコロラド大学東アジアプログラム（TEA）コロラド大学ボールダー校東アジア教育プログラム代表キャサリン・石田先生, プログラムのセミナー・ディレクター兼インストラクターのリン・パリシ先生, アメリカン・スクール・イン・ジャパンの東京コーディネーター兼オンライン・インストラクターのキャサリン・クラウス先生, 日本側は東京大学の恒吉僚子先生, 額賀美紗子先生, 高橋史子先生, 高津紫乃さん, 住野満稲子さん。

(2) 最近の日本ワークショップ, セミナー
2017 年東アジア教育プログラム・セミナー：「首都東京のイメージから日本のイメージを再構築する」
アメリカ全土から 10 名のコロラド大学プログラム卒業生が, 2017 年 4 月から 7 月までの 2 回のセミナーに参加。このセミナーは, 日米財団とフリーマン財団が資金援助したものである。参加者は春期 30 時間のオンラインセミナーを終えた後, 明治時代から 2020 年のオリンピック準備のための現行のキャンペーンまで, 国と世界のアイデンティティをテーマにした 10 日間の体験セミナーを東京で開催した。

(3) 2016 年 東アジア教育プログラム・夏期研究セミナー講座：「オリンピックを通じた日本の挑戦：20 世紀の遺産, 21 世紀の願望」
2016 年 7 月 10-15 日にアメリカ全土の中等教育社会科教員のために開催された 5 日間の講座は, 現代日本社会, 政府, 2020 年オリンピック・パラリンピックを通じた 21 世紀のリーダー育成, 日本のグローバル・アジア関係について研修した。このセミナーは, コロラド大学アジア研究プログラムと日米財団から「オリンピックがくれるチャンス：教室で日本に再注目」の一環として資金提供を受けた。

(4) このアンケートは, アメリカの教員が訪問した後 1 週間から 10 日後までに, 東京の 5 校の児童のうち 3 校は全校生徒に, 2 校は授業を受けた学年・クラスに実施された。

(5) このインタヴューは, アメリカの教員訪問後の夏休み中に, 東京の 5 校のうち 4 校の教員計 4 人に実施された。

参考文献

金森強（編著）(2003)「小学校の英語教育　指導者に求められる理論と実践」教育出版
齋藤孝,斎藤兆史（2004)「日本語力と英語力」中央公論新社
佐藤学,内田伸子,大津由紀雄(2011)「佐藤学 内田伸子 大津由紀雄が語ることばの学び,英語の学び」ラボ教育センター
恒吉僚子(1996)「多文化時代の英語教育」『現代英語教育』1996 年８月号 pp.24-26
西中隆・大阪市立真田山小学校編著（1996)「公立学校における国際理解・英語学習」明治図書
樋口忠彦（編集委員長）,金森強・國方太司（編集委員）(2005)「これからの小学校英語教育―理論と実践―」研究社

樋口忠彦（代表）・加賀田哲也・泉惠美子・衣笠知子［編者］（2013）「小学校英語教育法入門」研究社

文部科学省「小学校学習指導要領　外国語活動１　目標」（2008）

文部科学省「小学校学習指導要領解説　外国語活動編」(2008)

ユネスコの学習権宣言（1985）